

《書評》

「実践コミュニティ」概念の再文脈化にむけて

——『コミュニティ・オヴ・プラクティス：

ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』を読む——

清水拓野

はじめに

本書『コミュニティ・オヴ・プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』（翔泳社 二〇〇二年十二月十七日初版 三九八頁 二八〇〇円＋税）は、エティエンヌ・ウエンガー（Etienne Wenger）、リチャード・マクダーモット（Richard McDermott）、ウイリアム・スナイダー（William Snyder）らによる *Cultivating Communities of Practice*. Harvard Business School Press, 2002. の訳書である。一見、人類学にも民俗学にも無関係な経営学関係の本のようだが、「実践コミュニティ（Communities of Practice）」という応用範囲の広い概念をめぐる示唆に富んだ著

書である。経営学における同概念への注目度の大きさは、原書が出版された同じ年に早々と邦訳書が出たという事実、そして、組織的知識創造理論で知られる野中郁次郎が解説を書いているという点からもうかがわれる。しかし、本書を経営学者だけが読むべき本と決めつけるのは、あまりにもったいない話である。人類学者や民俗学者には馴染みのない概念群が登場するものの、我々にも大なり小なり何らかの恩恵を与えてくれるだろう。実際、本書の中核的概念「実践コミュニティ」は、近年の日本の人類学では数多くの議論の発端となっている（C. 田辺・松田編 二〇〇二、田辺 二〇〇三）。そこで以下では、この「実践コミュニティ」概念の学術史的背景を概観しながら、本書の人類学的な意義について考えてみたい。

『京都民俗』(京都民俗学会) 第22号
12所429 書評

本書の構成

まずは本書の構成を示そう。本書は、監修者序文、序章と

10の章、及び解説で構成される。

監修者序文 —— 知識社会の新たな組織形態 (野村恭彦)

序章

第一章 実践コミュニケーションについて

—— 今なぜ重要なのか

第二章 実践コミュニケーションとその構成要素

第三章 実践コミュニケーション育成の七原則

第四章 発展の初期段階

第五章 発展の成熟段階

第六章 分散型コミュニケーションという挑戦

第七章 実践コミュニケーションのメインタム面

第八章 価値創造の評価と管理

第九章 コミュニティを核とした知識促進活動

第十章 世界の再構築 —— 組織を超えたコミュニケーション

解説 (野中郁次郎)

以上が本書の基本的構成である。では、順を追ってそれを

和のとれた関係に取り込むことでその経済的効力を最大限に
引き出せる、という考えに基づく。第四章では、「実践コミュ
ニティ」の発展段階に言及する。ここでは、「潜在 (potential)」と「結託 (coalescing)」という発展の初期段階を取
り上げ、そこで起る問題点とその克服方法について論じる。
第五章では、「成熟 (maturing)」、「維持・向上 (steering)」、「変容 (transformation)」という発展の後期段階
を取り上げ、それぞれに付随する課題とその乗り越え方を検
討する。つまり、本書は第四章と第五章で、「実践コミュニ
ティ」に計五つの発展段階があり、各段階に固有の問題を解
決することでその健全な育成を果たせる、と主張する。
一方、第六章では、「分散型コミュニケーション (distributed
communication)」に話が及ぶ。これは、国境や文化的相違、
所属組織などの複数の境界をまたぐような「実践コミュニ
ティ」のメインタム面にも光を当て、「実践コミュニ
ティ」は万能なものではなく、例えば派閥主義や階層化、
文書化至上主義など、問題の起る可能性が常にあると指摘
する。これらの問題は、第二章で挙げられた「実践コミュニ
ティ」の三つの構成要素、すなわち「領域」「コミュニティ」

これらの内容を見てみよう。

まず、監修者序文では、経営者の野村恭彦が「実践コミュ

ニティ」の基本的特徴を紹介し、それが企業のビジネス成果

に対して持つ潜在的な重要性を説く。続く序章では、著者ら

自身も「実践コミュニケーション」の概念や手法がさまざまなビジ

ネス・リーダーの関心を集めつつあると指摘する。第一章で

は、今なぜ「実践コミュニケーション」に注目することが重要な

かについて、グローバルな知識経済との関係で取り上げる。

ここでは、知識の二形態、すなわち形式知と暗黙知という概

念を紹介し、「実践コミュニケーション」が両者結び合わせて知

識を体系化するような理想的な環境を提供すると論じる。第

二章では、「実践コミュニケーション」の構成要素である「領域

(domain)」、「コミュニティ (community)」、「実践 (prac-

tice)」の定義をする。さらに、組織との関係で「実践コミュ

ニティ」は、さまざまな形態をとる一方で、プロジェクト・

チームや作業チームなどの他の組織構造とも異なる点を強調

する。以上が「実践コミュニケーション」の基本的特徴を紹介する

本書の導入部分である。

では、以降の内容を見てみよう。第三章では、「実践コミュ

ニティ」が企業組織に好影響をもたらすという前提に立つて、

それを育成するための七つの原則を紹介する。これは、「実

践コミュニケーション」を野放し状態にするのではなく、組織と調

「実践」のそれぞれに関わるものであり、それ相応の対応を
求める。

ところで、以上の第三章、第七章までが「実践コミュニ

ティ」に関する言及であるのに対して、最後の三章ではそれが

属する企業組織、さらに、外部世界との関係をより徹底して

述べる。まず、第八章では、「実践コミュニケーション」の働きを

どのように評価・管理するべきかという問題に目を向ける。

つまり、何を基準としてその効果を評価し、それが所属する

組織の指導層のサポートをいかにして得るか、という点が考

慮の対象となる。第九章では、「実践コミュニケーション」の育成

とその維持・向上がそれぞれ自体のためではなく、組織のために

必要であるという認識に基づいて、それを核とした組織

レベルの知識推進活動の重要性を説く。ここでは、「実践コ

ミュニティ」での知識創造をいかにして組織全体に波及する

か、そして、そのために組織側はどのようなサポート体制を

敷くべきか、という点を重要課題として取り上げる。第十章

では、「拡張型ナレッジ・システム (the extended knowledge system)

edge system)」という概念を提示する。これは、ひとつの

組織を超えて存在する「実践コミュニケーション」が作り出す知識

創造の網の目を指す。そして、現時点で著者らは、この「拡

張型ナレッジ・システム」を実在としてではなく、未来社会

のひとつの姿として捉えており、それが世界を再構築する可

能性を見る。

最後に、経営学者の野中郁次郎が独自の解説で本書を締め括る。彼は、自らが編み出した組織的知識創造理論の中核的概念のひとつである「場」を「実践コミュニティ」と対比し、暗黙知と形式知の二重性から成る知識創造プロセスを促すための必要条件について述べる。

「実践コミュニティ」概念の背景

本書の構成は以上の通りであるが、人類学や民俗学とはほぼ速い経営学の専門書であると受けとめる人も多いだろう。実利志向の強い経営学に関心を反映してか、現実の企業運営に「実践コミュニティ」をいかに役立てるかという点が本書を貫く主題となっている。その意味では、確かに経営学の図

書であると言える。しかしこの書評では、「実践コミュニティ」という概念が、教育人類学的・認知科学的議論の中から生まれたものであるという点に読者の注意を喚起したい。そのような事実を踏まえて読むと、さまざまな人類学的・民俗学的な可能性を本書に見いだすだろう。そこで、「実践コミュニティ」概念の学術史的背景を以下で簡単に述べておきたい。

アメリカの教育人類学では、一九七〇年代の初めごろまで、

フォーマル教育 (formal education) とインフォーマル教育 (informal education) という二項対立をめぐる議論が活発であった。すなわち、前者が学校などの体系的・組織的な教育を意味したのに対して、後者は、学校のないような「未開社会」に見られる非公式的な社会化 (家庭や親族組織などにおける) を指し、徒弟制 (apprenticeship) も含んだ。また、前者が実践から乖離した脱文脈的な状況での抽象的・一般的な学習を特徴とする一方で、後者は具体的な日常的実践に埋め込まれた学習を主とした。そして、インフォーマル教育の文脈依存的な学習は、フォーマル教育の脱文脈的学習のような柔軟な学習移転 (crossing transfer) が困難なので、それは文脈を超えた応用の難しい限定的な学習であるとして「負」のイメージを付せられた (Griffiths and Cole 1973)。

このような二項対立に反論する形で、教育人類学者のジーン・レイヴ (Gene Lave) は、一九七〇年代初頭から西アフリカ・リベリアのバイ族とゴラ族の仕立屋の徒弟制を調査研究してきた (Lave 1977, 1982)。そしてレイヴは、フォーマル教育の現場にもフォーマルな側面が見られるという点、そして、学校でも徒弟制でも (或いは如何なる教育形態において) も学習とは常に文脈に埋め込まれた性質のものであること

を主張した。さらに、徒弟制には学校のな教授の働きかけ (didactic teaching) が顕著に見られないにも関わらず、ある一定の教育成果を挙げている点に注目して、インフォーマル教育に対して貼られた従来の「負」のレッテルを払拭し、それを再評価する必要性を説いた。レイヴ&エンガー (一九九三) の有名な正統的周辺参加論 (以下L.P.論と略す) は、徒弟制を再評価しようとするこのような努力の中から生まれたのである。端的に言えば、このL.P.論とは、学習を状況に埋め込まれたものとみなす理論である。それは、この抽象的な状況というものを、徒弟制的な実体のようなものと見て概念化する。これが「実践コミュニティ」と呼ばれる概念である。そして、人の学習を、この「実践コミュニティ」への漸進的な参加の過程として定義する。L.P.論は、フォーマル教育 v.s. インフォーマル教育という素朴な二元論を超えた学習概念の再文脈化を促したのである (Pfeiffer 1991: 93)。

ただし、L.P.論が構築された当時は、「実践コミュニティ」概念はまだそれほど完成度が高くなかった。例えば、実践者が時として優位な「実践コミュニティ」に対しても、保険会社のようなものをうまく説明できなかった。そこで、保険会社の請求処理業務を担当する事務所を研究対象としたウエンガー (一九九〇) は「隣間共同体 (intertial community)

考察

以上で示した学術史的背景を見ても明らか通り、本書はL.P.論と連続性をもつものであり、ウエンガーの前一著「一九九〇、一九九八」と共に「実践コミュニティ」概念の三部作を成す書である。そして、このようにして整理することで、本書が示唆する豊かな可能性がより鮮明に見える。ただし、紙面の都合上、その全てを提示することはできないので、ここでは主に次の二点を挙げるに止めたい。

として定義する。

L.P.論と連続性をもつものであり、ウエンガーの前一著「一九九〇、一九九八」と共に「実践コミュニティ」概念の三部作を成す書である。そして、このようにして整理することで、本書が示唆する豊かな可能性がより鮮明に見える。ただし、紙面の都合上、その全てを提示することはできないので、ここでは主に次の二点を挙げるに止めたい。

ひとつは、「実践コミュニティ」と学習の関係についてである。本書では、哲学的志向が強いウエンガーの前一著にはなかった「実践コミュニティ」の発展段階という考えが登場する。また、複雑な現代的組織 (特に企業組織) との相互関

係をより明確に概念化する。さらに、「実践コミュニティ」のアイナス面も取り上げる。従って、これらの新たな考えを参照枠とすることで、変化の激しい現代社会の組織における学習と実践の諸問題により包括的なアプローチができる。日本の人類学研究では、「実践コミュニティ」概念が学習との関連で既に精査の対象とされているが、それは主にLPP論に付随する旧型のそれである（C. 田辺、松田編 二〇〇二）。今後は、ウエングァーによるこの改訂版「実践コミュニティ」概念も検討の対象とし、人類学的議論への積極的な還元がなされることを期待したい。

さて、本書が示唆するもう一点は、「実践コミュニティ」と暗黙知との関係である。本書は、「実践コミュニティ」が暗黙知（ポラニ―一九八〇）の伝達と共有に決定的な役割を果たすと主張する。これは極めて考察に値する問題である。つまり、「実践コミュニティ」が本当にどのような役目を果たしているとしたら、それはその内外にいかなる条件を備える時か、という点がエスノグラフィックに解明されるべきだろう。ところで、この書評が原書ではなく、敢えて訳書の方を取り上げた理由は、野中郁次郎が組織的知識創造論（野中・竹内 一九九六）の立場から解説を書いているからである。すなわち、「実践コミュニティ」概念を、暗黙知の伝達と共有に同様の威力を発するという野中の「場」の概念と系

未分化な社会組織の分析から発展したLPP論に由来するのだから。その意味では、「実践コミュニティ」は太古の昔から続く、人類の知識を核とした社会的枠組みなのだ」と述べて、同概念の時空間を越えた普遍性を強調する著者らの指摘は注目に値するだろう。

注

- (1) ここでは原書でなく、敢えて訳書の方を取り上げたが、その理由は後述の通りである（考察」の章を参照）。
- (2) コミュニティ・オブ・プラクティス（Communities of Practice）の訳語としては、「実践共同体」（福島 一九九三）や「実践コミュニティ」（田辺 二〇〇三）などがあり、必ずしも統一されていないが、ここでは本書の訳語に従って後者を用いる。
- (3) 文化人類学（特に教育人類学）が筆者の専門という点もあって、以下の議論が人類学にのみ終始している点はどうも承願したい。ただし、人類学に当てはまることは、民俗学にも該当することが多いので、その点に留意して読んでいただければ幸いである。
- (4) 正式には、Legitimate Peripheral Participation theory と呼ばれる。
- (5) この理論の構築に関与したウエングァーは、本書の著者のウエ

統的に比較することもできる。「場」の概念は、日本の発想なのかも知れないが、それによってアメリカ発祥の「実践コミュニティ」概念を相対化するのはいかに意義があるだろう。以上、本書が人類学的議論に寄与しえる可能性について二点ほど挙げた。しかし、ここで最も重要なのは、本書のアイナスに賛同する経営学者やビジネス・リーダーのように「実践コミュニティ」の存在を自明視するべきではない、ということである。強い実利志向をもつ彼らとは違って、人類学者・民俗学者はそれを分析枠組みのひとつとして、あくまでも冷静に受けとめるべきである。ただし、政治、経済、法、教育、医療といった諸システムに分化するのが現代社会の特徴であり「福島一九九八）、従来の地縁・血縁や共同体という概念、或いは親族理論などがうまく適合できないような社会状況が増えているのであるれば、人間関係の新たな捉え方を提示するこの「実践コミュニティ」概念の価値を真剣に吟味すべきだろう。また、もし人類学的な思考が比較的未分化な社会の分析を出発点としており、それで得た知見に基づいて現代社会を見直すという特徴をもつのであれば（福島 二〇〇〇）、「実践コミュニティ」概念は、我々の住む複雑な社会のあり様について考察するに適した枠組みと言えのるかも知れない。何しろ「実践コミュニティ」概念は、徒弟制という相対的に

参考文献

榎島真人

一九九三 「解説・認知という実践——「状況的学習」への正統的で周辺的なコメントル」『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』（佐伯胖訳、東京：産業図書、二二二—二八二頁）

一九九八 「文化からシステムへ——人類学的実践について」『観察』『社会人類学年報』二四：一一—一八頁

二〇〇〇 「未分化として見る——人類学的方法の視座」『西山賢一編』『生命の知恵・ヒソナの知恵』丸善ライブラリ、二〇七—二二九頁

Lave, J. 1977 Cognitive Consequences of Traditional Apprenticeship Training in West Africa. *Anthropology and Education Quarterly* 8 (3): 177-80

1982 A Comparative Approach to Educational Forms and Learning Processes. *Anthropology and Education Quarterly* 13 (2): 181-87

レイヴ, J. (Lave, J.) + ウエングァー, E. (Wenger, E.)

ウエングァーと同じ人物である。
(6) 本書の三四頁を参照。

一九九三 『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』

(佐伯胖訳) 東京：産業図書 (Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation. Cambridge: Cambridge UP, 1991).

野中郁次郎・竹内弘高

一九九六 『知識創造企業』(梅本勝博訳) 東洋経済新報社
(The Knowledge-Creating Company: How Japanese
Companies Create the Dynamics of Innovation.
Oxford UP, 1995).

Pelissier, C. 1991 The Anthropology of Teaching and Learning.
Annual Review of Anthropology 20: 75-95

ポライマー, M. (Ponzi, M.)
一九八〇 『暗知の次元——言語から非言語へ』(佐藤敬三
訳) 紀伊國屋書店 (The Tacit Dimension. Lon-
don: Routledge & Kegan Paul, 1966).

《二〇〇四・二〇〇五年度 京都民俗学会談話会報告》

▽ 第一八八回例会

平成一六年五月二十五日(火)
発表者 植木行宣氏(京都民俗学会会長)
論題 「都市祭礼の展開」
(キヤンパスマテラザ京都)

▽ 第一八九回例会

平成一六年七月一七日(土)
発表者 小澤輝美子氏(佛教大学大学院)
論題 「近江の郷祭と座の周辺——意識と語りの表層」
(キヤンパスマテラザ京都)

▽ 第一九〇回例会

平成一六年一月五日(金)
発表者 川村清志氏(神戸学院大学助手)
論題 「フイロドリク・ノンイヤリス・アプター
——七つの浦、四方(しかた)の風、終章」
(キヤンパスマテラザ京都)

▽ 第三回年次研究大会

平成一六年二月五日(日)
会場 京都市学校歴史博物館

稲場紀久雄氏(大坂経済大学教授)
橋本 章氏(長浜城歴史博物館)
「シジ(神事)からオコナイへ——柳田民俗学の失敗と
継承された欺瞞」

崔 杉昌氏(仏教大学大学院)

「宮座の姿質と再編——岡山県阿哲郡神郷町高瀬の事例よ
り」
河原典史氏(立命館大学助教授)
「カナタ日本人移民の個人史をめぐる調査法の再考——水
産加工業者を例にして」

村上忠喜氏(京都市文化財保護課)
「記憶から資料へ——京都映像アーカイブプロジェクトの
活動を通して」
〈特別研究発表〉

蘇理剛志氏(総合研究大学院大学大学院)
「副業としての工芸にみる山村の近現代——紀州保田紙生
産地の環境・労働・歴史性」

Scribner, S. Cole, M. 1973 Cognitive Consequences of Formal and Informal
Education. *Science* 182: 553-59
田辺繁治
二〇〇三 『生き方の人類学——実践とは何か』 東京：講談
社現代新書
田辺繁治・松田泰二編
二〇〇二 『日常の実践のエスノグラフィ——語り・コミュ
ニティ・アイデンティティ』 京都：世界思想社
Wenger, E. 1990 *Toward a Theory of Cultural Transparency: Eleme
nts of a Discourse of the Visible and the Invisible.*
Doctoral Dissertation, Information and Com-
puter Science, University of California, Irvine.
1998 *Communities of Practice: Learning, Meaning, and
Identity.* Cambridge: Cambridge UP.